


昭和16年4月四ツ橋文楽座「二人禿」初演時の筋書

<p style="text-align: center;">下の卷 二 人</p> <p style="text-align: center;">禿禿 竹竹竹竹</p> <p style="text-align: center;">本本本本</p> <p style="text-align: center;">さ陸文源 の路太太 太夫夫夫夫</p>	<p style="text-align: center;">上の卷 濱千 鳥</p> <p style="text-align: center;">女士 豐竹竹竹</p> <p style="text-align: center;">澤澤澤澤澤澤澤</p> <p style="text-align: center;">仙廣鶴叶友友友 織松播雄和 太太 子島路太 泉 松若郎郎若平造 夫夫夫夫夫</p>
--	--



西亭作詞符 山村若菜振附 大塚克三舞臺裝置

景事 はる **春げしき双草紙** ふたつぎらし

上の卷 濱千鳥
下の卷 二人禿

(床本) 里げしき双草紙

上の卷 濱千鳥

本曲は今度新しく西亭により作詞作曲され、初めて文楽座の舞臺に上場されることになつた所作事で、上の卷濱千鳥、下の卷二人禿の全二景からなり、振附は山村若菜がこれに當つた美しく賑やかな新曲である。

おもしろや、朝な夕なの浦げしき、君を松風漁火の、さめてほのく、明石湯、わしが思ひの、はかもなき、海人が焼くかや薄煙り、消ゆるも淡路、文づての、泣く音淋しい磯千鳥、エ、にくてらしい眞顔でナ、口舌にわしを泣かそでな、主の思ひの朝ぎりに、こちが心の須磨の浦、汐の満千の氣も知らで、磯邊くの移り香に、ありし其夜が思はるゝ、夜さも伏床に寝もやらで、來るか來るかと濱へ出て見れば、小松の葉越しの月が、につと淋しく笑やした、逢ふた今宵は千夜の一、程はやらじと引綱に、つなぎとめたるもやひ舟、春のちんく千鳥が

豐野野竹野鶴鶴鶴豐野鶴豐鶴野野野豐豊竹竹竹竹豊竹竹
 澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤竹竹本本本本竹本本
 猿勝龍團勝一清友仙吉友新友八喜吉千呂南土叶隅宮津常
 二之 郎右衛 三三 十太太 代之 太 太 太 太 太 太 太 太 太 太 太
 郎介市作芳門友郎郎季郎郎造助彌夫夫夫夫夫夫夫夫夫夫夫夫夫夫夫夫夫

いふにや、今宵一打櫓で、のぼんえぼん、夏のちんちん
 千鳥がいふにや、今宵二打櫓で、のぼんえぼん、秋は、
 さんく三打櫓で、ぼんぼ、冬は八打櫓で、のぼんえぼ
 ん、ヤレのぼんえぼん、引いつ引かれつ女浪と男浪、濱
 の眞砂の盡くるなき、實に面白や、四季の浦。

下の巻 二人 禿

春風に、うかれくつて花の里、かむろくと、澤山
 そふに、言ふておくれな、エ、うきの里、そとでなぶら
 れ、内ではせかれ、ぼんに身もよも内證の、文の使ひの
 二度三度、いつが春やら、花ぢややら、朝の六ツから、
 上衣下衣引き重ね、禿は袖のふり初め、つくつくつくに
 は羽をつく、二一二三四、五重に、七重に、琴は十三十
 四十五、二十三夜の月さま、ついた、てんまでついた、
 エ、ついたえ、てんく手まりの、糸さま、可愛い、京
 で一番糸屋の娘、二番よいのは、人形屋の娘、三でよい
 のは酒屋の娘、酒屋は娘は、きりよふが良ふて、京で一
 番、大阪で二番、さがで三番、吉野で四番、御所で五番
 のいとさん見れば、立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は
 百合の花、咲いたく、咲いた櫻になぜ駒繫ぐ、氣もつ
 風さへ、よぎて吹く、花も可愛か、手折もせまい、かわ
 い小櫻承櫻、かむろは室の初櫻、散るは吉野の山櫻、さ
 て面白い花の里、心ごころで楽しまん。

